

現代の訳経僧

井筒俊彦著／野平宗宏訳
『禅仏教の哲学に向けて』

ふねつま舎 二〇一四年一月

本書は、語学の天才にして、イスラームをはじめとする東洋思想研究で大きな功績を残し、また自ら哲学する人でもあった井筒俊彦（一九一四—一九九三）による英語の論集、*Toward a Philosophy of Zen Buddhism*, Boulder: Prajna Press, 1982（初版は一九七七年にテヘランの Imperial Iranian Academy of Philosophy から出版されている）を、野平宗弘氏が本邦で初めて日本語に訳したものである。内容は、井筒がマギル大学イスラーム学研究所テヘラン支部に着任した一九六九年から、イラン革命のため帰国する一〇年ほどの海外生活中に記した「禅」にかんする英語論文七本からなる。

英語によって「禅」を論じた日本人学者といえば、鈴木大拙（一八七〇—一九六六）が先んじていたわけだが、その鈴木大拙の英文論考の和訳本も二〇〇〇年代以降、次々に出版されている。「禅」が一見相反するようなアメリカ合理主義に受け入れられていく要因を、中村元は一九六〇年にすでに指摘していた『比較思想論』岩波書店、一九六〇・三〇九—三二六が、鈴木大拙のアメリカ人に向けて発せられた言葉が日本でも受容されるのは、いささか穿った見方をすれば、それだけ日本がアメリカナイズされてしまったからとも言えようか。翻訳出版自体

は、研究進展の着実な一過程に違いない。

ここで求められているのは、野平氏の訳業についてのコメントであって、井筒の論考についてはないから、井筒の仕事にフォローしてきていない評者でも、なんとかその任を果たせるかと小考していたが、豈図らんや、井筒をも包み込んでしまうかのような訳者の大きさに圧倒されてしまった。野平氏は、あたかも現代の訳経僧ではないか、と。

訳経僧といえば、サンスクリット語（純粹なサンスクリット語のほか、プラーケリットの部類に近い所謂 *Buddhist Hybrid Sanskrit* で記された経典も多い）やガンダーラ語などのプラーケリット諸語で記された仏教聖典を、それぞれの時代の中国語に翻訳した、竺法護（三世紀後半）、鳩摩羅什（四世紀後半）、玄奘（七世紀前半）などが、よく知られている。彼らが生涯のうちに膨大な量の経典を翻訳できたのは、じつは、集団的な分業によってベルトコンベアー方式で短時間に翻訳がなされていたからである、船山徹『仏典はどう漢訳されたのか——ストロガが経典になるとき』（岩波書店、二〇一三）に詳しく紹介されている。それによれば、一、ひとりがサンスクリット語の原文を声に出して読み上げ、二、その左に坐る者も原文に目を通しながら意味内容などの問題がないか討議する。三、右に坐る者が読み上げられた文に誤りがないかチェックする。四、耳で聞いたサンスクリット文をそのままの音で漢字に書き取る、つまり音写する。五、それらを単語ごとに意味をとって漢語に置き換える。六、中国語文法に則って漢字の順序を入れ替えて、中国語の文章として意味が通るようにする。七、原文と翻訳文をチェックし、八、冗長な部分を削除する。九、さらに両者を比べて添削

する「上掲書：五八一―五九」といった流れ作業だったという。

本書の訳者を「現代の訳経僧」と表現したが、その訳経僧の意味概念は、玄奘らを指す場合とかなり異なることになる。井筒が英語で表現したことを、野平氏は英語で解釈し日本語で表現する。禅が確立されたのは中国だから当然、井筒は『碧巖録』など数々の漢籍を引き合いにだすし、日本の道元の書からも引用して英語で紹介している。そうした箇所は逐一、それらの原典に当たり漢文の場合はその訓読および原文を、和文の場合は原文を、訳註として、あるいは本文に併記する形で補っている。つまり、漢文および和文の原文↓井筒の英文意訳↓日本語訳と展開した原点(原典)に遡って正確性を図っているのである。さらに、それがサンスクリット原典まで遡れる場合、その和訳も補っている。具体的には、『唯識三十頌』の一節について、

(井筒英文)

'As the mind perceives no object, it remains as pure Awareness.' [上

掲英文論集：75, II, 35-36]

(野平和訳)

「心がいかなる客体も知覚しないなら、それは純粋な〈覚知のありありある〉」 [本書：98, II, 12-14]

(原註) In his *Trimshika-Vijnaptimātrata-Siddhi* [上掲英文論集：82]

(野平和訳) 『唯識三十頌』より。 [本書：310, I, 15]

(野平訳註) (漢訳訓読) 智が都(すべ)て所得無くんば、爾時

(そのとき) には唯識に住(じゅう)するなり。(梵文和訳)

知が認識の対象を「実在するものとして」表象しないとき

は、〈唯だ識のみなること〉のうちに住したのである(『唯識三十頌』二十八。中村元『論書・他』大乗仏典七、東京書籍、二〇〇四年)。 [本書：329, II, 11-13]

評者の好みからすれば、ここにサンスクリット原文も添えてほしかったが、こんなことを言い出せば、『コーラン』からの引用もあるから、アラビア語原文も提示しなければならぬことになる。さらなる学術性を求める読者は、示されている情報を元に自分で当たれば良いわけで、訳者のやり方が最も妥当な提示方法だと言えよう。

語彙レベルでは、語学の天才・井筒のことであるから、サンスクリット語、パリー語、漢語のみならず、ギリシャ語、ドイツ語、フランス語などが所々に使われており、それらも巧みに、さりげなく訳して見せてくれていて、全く違和感を感じさせない。

とことん咀嚼し、分かりやすい日本語で表現するという作業は、やはり、訳経僧と表現するのがもっとも相応しいのだと思う。我々が以前から持っていたイメージとしての訳経僧だ。そして、訳経僧たる者、自ら哲学者でもあるのだと熟々感じた。たとえば、次の下り、

Without tarrying on the plane of common-sense or empirical thinking, where the primary experience of Reality, including even the absolute ego, in its pure 'is-ness' is necessarily broken up into objectified pieces, Zen proposes to grasp Man directly as an absolute selfhood prior to his being objectified into a 'thing'. Only then, it maintains,

can we hope to obtain a true image of Man representing him as he really is, that is, in his real, immediate 'is-ness'. [上掲英文論集: 4, II, 19-26]

純粹な「ありのまま is-ness」の状態で、絶対的な自我も含んだヘリアリテイの初源的体験が必然的に解体されて客体的な断片になってしまうような常識あるいは経験的思考の地平に留まることなく、禅は、「物」へと客体化される以前の絶対的な自己としての「人」を直に把握することを目論む。そのときのみ本当にありのままの、つまり、リアルな、直接無媒介的な「ありのまま」の状態で己を表象する「人」の真のイメージの獲得を望むことができるのだと、禅は主張する。[本書: 5, II, 3-7]

「少年時代からカントが好きだった」と公言する訳者の、哲学者の人の面影を伺わせてくれる部位ではないだろうか。

この部分は第I章「無位の真人——禅におけるフィールド覚知の問題——」に含まれるが、この章に相当する論考は、訳者による解題に紹介されるとおり、井筒本人による和訳も存在する。だが、全くの翻訳でないことを理由に割愛されていない。事実、右の引用の相当箇所などは全く異なる文章で表現されていた。[井筒俊彦著『コスモスとアンチコスモス——東洋哲学のために』(岩波書店、一九八九) .. 三四九]

こうした対処方法に表れているように、訳者は、井筒の、ほぼ全ての論著を読破した上で、本書所収の七本の論文を井筒の諸業績のなかにしかと位置づけることに配慮している。研究者としての資質の高さを伺うことができる堅実さだが、そうした資質は、『新しい意識——ベトナムの亡命思想家フアム・コン・

ティエン』(岩波書店、二〇〇九)として刊行されている野平氏の博士論文で実証済みであった。大学ではベトナム語ベトナム文学を主に講じておられる訳者だが、ベトナム人思想家の研究から発してバランス良く視野を拡げ、他領域の研究者にも資するこうした仕事をこなすことのできる力量は、今後も大いに発揮していただきたい。

甚だ些末で、いずれも誤りと呼べるものではないのだが、評者の義務として二点だけ指摘しておく。まず、「無」「空」あるいは「空性」を意味するサンスクリット語 *śūnyatā* のカタカナ表記が「シュー・ン・ヤター」となっている[本書: 一二八、一三七—一三九、一四二—一四五、二〇四、二八二]が、「シューニヤター」としたほうが、より元の発音に近いだろう[中村元「サンスクリットの発音と現代における表記法」『東方』第三号(1987) pp. 5-23, Whitney, William Dwight, *Sanskrit Grammar*, Cambridge Mass: Harvard Univ. Press, 2nd ed., 1889, p.19]。また、『唯識三十頌』の「頌」の字について、一箇所[本書: 一三二]で「しよう」と振り仮名がふられているが、一般的には「じゅ」と読んでいる。

こうしたマイナーな修正はともかくとして、本書の日本語は非常に読みやすい。本書が扱う禅は不立文字[本書: 一一二]の世界だから、言葉で表現することは到底能われないわけだが、所詮、世俗諦[本書: 一一三]に住む我々には、言葉で表現するしか他に手段がない。本書には言及されなかった単語だが、仏教がとく究極の境地ニルヴァーナ (*nirvāṇa*) も「涅槃」と漢訳して、それで分かった気になっている。だが、この「涅槃」を目指して様々な方途がみだされ、「涅槃」を巡って無数の文献が著され続けてきた。仏典あるいは仏教関連書がすべてそ

のためのものであると言ってもいいだろう。究極の境地をひとつの言葉で表現することの不可能性、だからこそその、言葉で表現することの無限の可能性、それを感じさせてくれたのが本書である。

二〇一四年は井筒の生誕百年にあたり、出身である慶応大学の出版会から『井筒俊彦全集』全十二巻と別巻が刊行されつつあるが、同年に本書が世に送られた意義、そして野平氏の功績も看過されてはならない。ふと気づいたが、今日平成二十七年一月七日は、井筒の第二三回忌祥月命日だ。井筒もにんまり北叟笑んでいることだろう。

(水野善文)